議会は何をしているのか

市民の代表として議論を

まるで「学芸会」？

地方議会は一体何をしているのか―。財政危機に直面する自治体が多いにもかかわらず、地方政治を担うはずの議会はその役割を果たしていないのが現状だ。地方議会の改革は急務である。

24～30日間の定例議会のうち、議員が必ず出席しなければならないのは、わずか6～9日ほどだ
（写真＝議会の日程を告げる柏原市議会のホームページ）

住民の声を代表して立法や予算をつくるのが地方議会の仕事、というのが一般的な市民の理解だろう。しかし、現実の地方議会で行われる立法は行政提案の審査だけで、多くの議員が行っているのは行政に対する一方通行型の批判や要望伝達だけだ。

議員は行政に質問するばかりで、議員どうしの討論が行われることはない。しかも、役所から職員が事前に聞き取りにやってきて、質問とその回答のすり合わせを行っている。

年四回の定例議会では、したがって、淡々と議決を取る。水面下でのやり取りが終わった状態だからだ。しかし、市民が本当に知りたいのはその水面下での喧々諤々の議論なのだ。質問するほうも答えるほうも、いわば台本通りなのだから、より効率的で生産的な議論が行われるはずがない。

形骸化した地方議会のありようを「まるで学芸会」と批判したのは、片山善博前鳥取県知事だ。地方議会の実態を知れば知るほど、片山前知事の言葉が決して過激ではないことがわかる。

柏原市議会を例にとると、年四回の定例議会は会期が二四～三〇日間で、本会議と委員会あわせて議員が出席しなければならないのは六～九日だ。各議員の政治活動により差はあるが、実質的な活動期間は年間でも二カ月（非常勤）に満たないだろう。

さらに短縮とはあきれる

もちろん、議会のない日は個々に議員活動をしているわけだが、質問時間は会派ごとに決められ、人数の多い会派では質問するのは年一回だけという議員もいる。質問しない議員は、極端にいえば席に座っているだけだ。

ところが、なかには質問時間を短縮すべきと提案する議員たちもいるから驚く。言論の府である議会で活発な議論を自ら放棄するのは怠慢と言われてもしかたない。しかも、日本の地方議員は先進各国と比べかなりの好待遇に浴している。さして専門能力が無いにも関らず報酬は高いという批判が根強い。

これからの地方分権時代に対応する自治体づくりのためには、このままではまずい。議員一人一人の熱意があれば本来求められている議会の機能を発揮することも可能なのである。そのためにも市民が普段から監視、点検を怠らないことが必要で、議会を傍聴する人が増えるだけでも、大きな効果をもたらすはずだ。

私たちの主張

サンヒル落札への疑問

柏原市健康保養センター「サンヒル柏原」がリニューアルオープンし、一〇月五日にはその開所式がおこなわれた。国が厚生年金や国民年金の保険料を使って全国に建てた施設の一つである「サンヒル柏原」は、約二万八千平方メートルの敷地に宿泊施設やレストランのほか、プールやテニスコートなどを備える総合的な健康増進施設だ。

宿泊施設のない柏原市にとってはかけがいのない施設であり、地域コミュニティーの中心施設として、また、地元の雇用確保という点でも期待されるのはわかるが、危機的な財政状況の柏原市が五億一五〇〇万円もの高値で落札するほどの価値があるのだろうか。

市民から「地域に必要な施設で、市が運営を継続してほしい」という要望が寄せられたというが、これも怪しい。たとえば、同じような施設で茨城県日立市が五月に三億四五〇〇万円で落札した「サンピア日立」がある。こちらは地元住民らが市による買い上げを要望して一万人以上の署名を集めた。日立市は、そうした地元住民の声を受けて入札への参加を決めたのであり、しかも、「サンピア日立」は黒字を計上しているのである。

「サンヒル柏原」は、存続を願って地元住民が署名を集めた形跡はないし、経営が黒字であるという話も以前はちらっと聞いたが最近はまったくない。維持管理費が赤字になればまた市民の負担が増える。

市の出資した財団法人が運営するが、さっそく退職した市OBが理事に就任するという噂である。結局のところ、職員の天下り先の確保が狙いと思われてもしかたないのではないか。

はまうら佳子の元気が出るコラム

チェンジ

日本人はどういうわけか「若い」ということに価値を置きます。お世辞とわかっても「若いですね」というのがほめ言葉になります。女性に対してならともかく、年配の男性に使うのは失礼と思うのですが、言われたほうもまんざらでもない顔をされます。

だから、若さは「未熟」を意味することを忘れて、日本人に対するのと同じように外国人の成人男性に使って怪訝な顔をされたりするのです。若いがゆえの底の浅さを補ってくれるのは、老練で自分の哲学をもつ、年輩のご意見番であるはず。高齢者には、年をかさねて得た経験と知恵を社会に還元する義務があるのです。

わたしは「心老いず」という言葉が大好きです。人生に目標をもってつねに努力を怠らない人は、心にシワをつくりません。

「成らぬは人の為さぬなりけり」と言われるように「できない」と思えば何もできません。老化も同じで、自分をはやばやと老人と自覚してしまったとき、人はほんとうに老け込んでしまうんです。

無理して強がることはありませんが、死の直前まで働く気構えが人間にとって大切なのではないでしょうか。わたしも実年齢より若いとよく言われますが、見た目だけでなく、やる気も十分。これからひと仕事もふた仕事もできると信じています。

information
イベント等のお知らせ

■新型インフルエンザのワクチン接種について（柏原市の独自施策）

新型インフルエンザのワクチン接種について、国は優先接種対象者の順位を決め、生活保護受給者や市民税非課税世帯の低所得者は無料とする基本方針を出しました。

柏原市では、市独自施策として、実費負担をされる方のうち、特に、重症化や最悪の場合死亡にまでいたるリスクの高い慢性的な内部疾患を有している方で、障害者手帳１級をお持ちの方を対象に接種費用（６，１５０円）を全額助成します。

内部疾患対象区分としては以下のとおりです。①慢性呼吸器疾患（呼吸器）、②慢性心疾患（心臓）、③慢性腎疾患（腎臓）、④疾患や治療に伴う免疫抑制（免疫）。

■あかちゃんあそびの広場

【10月27日(火)／13時30分～15時／子育て支援センター「スキップＫＩＤＳ」(電話973-5519)／対象＝保育所・幼稚園に通っていない就学前のお子さん／施設解放】

■子育て相談会

【10月29日(木)／10時～11時30分／旭丘まぶね保育園／問い合わせ＝旭丘子育て支援センター「ハーモニー」(電話976-0001)】

■世界で一つだけの絵本をつくろうⅢ

【10月31日(土)／14時／国分図書館4階(電話975-1212)】

パトロール

人間関係では「小さな親切、大きなお世話」といった状況が時々ある。善意の行為が相手を苛立たせてしまったりする▼先月、めでたく金婚式を迎えた老婦人がちょっと興奮気味にこう語っていた。「市が表彰してくれるというので会場へ行ったら、雛壇に市長さんや議員さんらがずらっと並んでいました。ほんとうは反対とちがう？　わたしらが主役なんだから、雛壇にあげて表彰してあげるのが本来の姿なんやないの」▼言われてみれば、たしかにそうだ。市のほうもさしたる考えもなく、例年通りにおこなっただけなのだろうが、「表彰してあげる」という思いがあるのは事実だろう▼些細なことだが、この老婦人が抱いた違和感は重要な意味を持つ。市政の主役は市民であり、市長や議員ではないことをあらためて教えられるからだ。